

子ども同士の関わりをつくりだすマルチモーダルな身体的・物質的 ふるまいの解明 (中間報告)

静岡県立大学短期大学部 甲 賀 崇 史

Uncovering Multimodal Bodily and Material Practices in Children's Peer Interactions

University of Shizuoka, Junior College, KOHGA, Takashi

要 約

本研究では、保育・幼児教育の中核をなす遊びにおいて、子ども同士がつくりだす一瞬一瞬の相互作用に着目して、それを可能にしているマルチモーダルな身体的・物質的ふるまいを記述する。近年、欧州を中心に影響力を強めている新物質論を理論的背景として、子ども同士の関わりを身体や空間などを含む物質的要素の纏れによって生成される過程と捉える。マルチモーダル分析を用いることによって、従来、子ども同士の関わりにおいて重視されてきた言語を多様な資源のひとつに位置づけ、身体やその他の物質の微細なふるまいを切り詰めることなく捉えることを目指し、子どもが遊びのなかで関わりをつくりだしていく実践を記述する。中間報告では、研究の背景、目的、方法を整理する。

【キーワード】 子ども同士の関わり, マルチモーダル分析, ポスト発達主義, 新物質論

Abstract

This report explores the possibility of describing multimodal bodily and material practices that enable moment-by-moment peer interaction in play, which lies at the core of early childhood education. Drawing on new materialism as a theoretical framework, the study approaches children's peer interaction as a process generated through the entanglement of bodies, spaces, and other material elements, rather than as a solely linguistic or interpersonal phenomenon. Using multimodal analysis, language is treated as one resource among many, alongside bodily movement and the subtle agencies of non-human materials. This approach seeks to attend to how interactions are organized in play without reducing or filtering out the fine-grained bodily and material dynamics involved. By focusing on interaction as an ongoing becoming-with among children and material environments, the study aims to offer an exploratory description of how children come to make interaction in play. This interim report outlines the background, aims, and methodological orientation of the research.

【Keywords】 Peer interactions, Multimodal analysis, Post-developmentalism, New materialism

問題と目的

ポスト発達主義と保育研究

現在、欧州を中心に、ポスト発達主義 (Taguchi, & Bodén, 2025) やポスト発達の子ども (Murris, 2016) といった用語とともに、「発達」という概念そのものを問題化する保育研究が増加している。「発達」は、歴史を通じて大人が多様に (再) 構築してきた子ども観や、個人と社会・制度が共有している保育観を規定する概念のひとつであり、発達の言説が保育実践に与える影響は小さくない (ダールベリ・モス・ペンス, 2022)。

とりわけ、近年のポストコロニアル理論やポストヒューマン理論、新物質論といった現代思想に依って立つ保育研究は、伝統的な発達主義が、大人／子どもの区別とそれがはらむ権力性の強化、自然／文化の二分と、(より社会的・文化的な) 大人になりつつある発達途上の子どもという理解、純粹無垢でかわいい未熟／有能な子どもといった図式、あるいは普遍的な (大人とは異なる) ヒューマニズム的子ども像へと回収される可能性を指摘している。

このように保育研究では、「子ども中心主義を掲げながらも、大人中心主義を覆い隠してしまうことで、概念が子どもを過小評価してしまう可能性はないか (Murris, Smalley, & Allan, 2020)」という視点から、「発達」という概念を精査する必要性が指摘されてきた。

子ども同士の関わりを捉える視点

こうした問題に応答しうる「発達」のあり方として、本研究では、子どもの発達を関係の生成の流れとして捉える視点を採用する。新物質論を理論的背景とすることで、発達は、身体、空間、声、砂、遊具、記録、保育者といった保育に関与する物質的要素が内作用 (intra-action) しながら状況を共生成していくプロセスとして理解される。この立場では、状況に差異をもたらす非-人間的物質は保育に関与するエージェンシーをもち、子どもにとって、能動的な物質との出会いはその都度の発達が立ち上がる契機となる。すなわち、能動的な物質との出会いそのものが、発達が生起する瞬間として捉えられる。

新物質論に依って立つ保育研究が主張する「物質性への転回 (material turn) (Taguchi, 2011)」は、子どもを発達の容器として捉えたり、子どもの内側にある能力を測定したり、大人に向かっていく子どもの発達を捉えたりする視点から距離を取ることを求める。むしろ、実践のなかで子どもを含む多様な要素の関係が物質化 (becoming-with) していく流れを、発達として理解しうる。

保育現場をフィールドにした「子ども同士の関わり」の発達研究は、月齢に応じた遊びの類型や特徴、相互作用の量的・質的な変化、子どもの発達に寄与する側面を明らかにしてきた。物質性への転回は、先行研究が「ふざけ」「からかい」「いざこざ」といった用語でカテゴリ化してきた「子ども同

士の関わり」研究が見落としてきた、関わり自体をつくりだす身体的・物質的ふるまいの実践を明らかにしうが、それを記述する分析方法が必要となる。

マルチモーダル分析の応用

発達理論あるいはコロニアリズムが結びついた子ども中心主義は、進化的・言語中心的なヒエラルヒーを形成してきた（Murris, 2018）。こうした枠組みを問い直し、新物質論の視点から子ども同士の関わりを検討するにあたり、映像データを用いた微視的分析は、運動する身体が常に関係性のなかにあり、差異との出会いに応答していく様態を記述するうえで有効である（MacRae, 2020）。前節で述べたように、発達を子どもと物質的要素との関係が生成・変容していく過程として捉えるためには、言語的相互作用の分析にとどまらず、身体、物、空間を含む実践の組織化過程を捉える方法が必要となる。そこで本研究では、エスノメソドロジー／会話分析に端を発したマルチモーダル分析を応用して、子ども同士の関わりが、どのような身体的、物質的な要素が作用しながら、その都度立ち上がっているのかを検討することを試みる。

マルチモーダル分析は、発話を相互作用の手がかりとしつつも、それを唯一の分析対象とするのではなく、身体配置、視線、動作、空間の構成といった多様な資源を等価に扱い、相互作用が実践のなかでどのように組織されているのかを記述するアプローチである（Mondada, 2016）。この方法は、行為や意味を個人の内面に還元せず、参与者自身が用いている可視的・可聴的な資源に基づいて相互作用を記述する点に特徴がある。とりわけ、Mondada（2018）が示すマルチモーダルな相互作用の分析は、身体や物、空間を背景的条件としてではなく、相互作用を構成する行為資源として捉える点に特徴がある。この視点に立つと、遊具や素材、場の配置は、子どもの行為を単に支える装置ではなく、身体の動きを方向づけ、他児との距離や関係のあり方を組織する要素として位置づけられる。

本研究では、このマルチモーダル分析の視点を用い、子ども同士の関わりが、発話のみならず、身体的ふるまい、物の扱われ方、空間の使われ方といった複数の資源の組み合わせによって、どのように生成されているのかを検討する。これにより、関わりを個人の意図や能力の発現としてではなく、実践のなかで組織される出来事として記述することを目指す。

方 法

調査協力園・調査期間

A 幼稚園の見晴台を対象に調査をおこなう。教職員および保護者の承諾はすでに得られている。フィールドエントリーは完了している。観察時間は9時～11時とし、おおむね週に1度の頻度で観察をおこなう。

調査手続き

小型のビデオカメラを設置して、映像記録を収集する。研究者は必要に応じて子どもと関わりなが

ら観察をおこない、フィールドノートを作成する。収集した映像データは、専用のHDDで整理・保存する。映像データは、アノテーションソフトELAN (<https://archive.mpi.nl/tla/elan>) に取り込む。情報を転記、注釈したうえで、Mondada(2022)に則してマルチモーダルトランスクリプトを作成する。トランスクリプトの作成は、収集されたデータから随時おこなう。

引用文献

- ダールベリ・モス・ペンス (2022) 浅井幸子 監訳『「保育の質」を超えて「評価」のオルタナティブを探る』。ミネルヴァ書房。(原著: Dahlberg, G., Moss, P., & Pence, A. (2013). *Beyond quality in early childhood education and care: Languages of evaluation*. Routledge.)
- Lenz Taguchi, H., & Bodén, L. (2025). The Emergence of Postdevelopmentalism and a Coconstitutive View of Development. In *Development and Postdevelopmentalism in Studies on, to, with, for, by Young Children* (pp. 59-82). Cham: Springer Nature Switzerland.
- MacRae, C. (2020). Tactful hands and vibrant mattering in the sand tray. *Journal of Early Childhood Literacy*, 20 (1), 90-110.
- Mondada, L. (2016). Challenges of multimodality: Language and the body in social interaction. *Journal of sociolinguistics*, 20 (3), 336-366.
- Mondada, L. (2018). Multiple temporalities of language and body in interaction: Challenges for transcribing multimodality. *Research on language and social interaction*, 51 (1), 85-106.
- Mondada, L. (2022). Conventions for Multimodal Transcription (version: 6.0.1)", available at: <https://www.lorenzamondada.net/multimodal-transcription> (閲覧日: 2025.12.25).
- Murris, K. (2016). *The posthuman child: Educational transformation through philosophy with picturebooks*. Routledge.
- Murris, K. (2018). Posthuman child and the diffractive teacher: Decolonizing the nature/culture binary. In *Research handbook on childhoodnature* (pp. 1-25). Springer, Cham.
- Murris, K., Smalley, K., & Allan, B. (2020). Postdevelopmental conceptions of child and childhood in education. In *Oxford research encyclopedia of education*.
- Taguchi, H. L. (2011). Investigating learning, participation and becoming in early childhood practices with a relational materialist approach. *Global studies of childhood*, 1 (1), 36-50.